

【翻訳】

フィリップ・デイヴィス 『バーナード・マラマッド—ある作家の生』(3)

奈良県立医科大学医学部看護学科

勝井 伸子

Translation of *Bernard Malamud: A Writer's Life* (3)

Nara Medical University School of Medicine Faculty of Nursing

Nobuko KATSUI

1951年11月5日—弟ユージーン

マラマッドがカクタニに1981年に語ったところによれば、「生活の代償」出版後しばらくして、父から、ただ「サム」と、つまり作品中の食料雑貨店主の名前で署名した、短い手紙を受け取った。それは「私が父自身の経験をもとにして物語を書いたことに対する、心にひびく承認のしるし」だった。ユージーンが兄に書き送ったところによれば、父親はその短編を引き出しにしまいこんでいたが、それが雑誌への「寄稿」であると書かれていると聞くと、バーニーが原稿料を払ってもらっていないのではと、突然心配し始めたということだった。だが、1950年以降残っている「お前の父、サム」と署名されている唯一の手紙は、つぎのような、ぎこちなく、文法の間違いで苦労したことがはっきりわかるものである。

お前が私たちのところから出て行くとは馬鹿なことをしたと思う。もしブルックリン(訳注 ブルックリンの誤り)で正規の教師の仕事が見つければ、暮らしも楽になるだろう。ニューヨーク州から出ていく人はいつでもだれでも残念だ。

1942年には、マラマッドはグレイブズエンド街を出て、フラットブッシュの街路樹がづく快適なワンルームの住まいに引っ越しており、その後アンと1945年に結婚してグリニッジヴィレッジのキングストリートへと移っていた。だがこの手紙が言っているのは、マラマッドが1949年にオレゴン州立大学の教

職を得て、コーヴァリスへ、西海岸へ生活の為にはるばる引っ越していくことを指している。

この悲しい別離の手紙に続いて、さらに悪い手紙が続く。1951年11月5日の手紙にはただ、「絶望して」と署名してある。

愛する息子バーニーへ

ユージーンの病気が悪いほうから最悪の状態になったことを知らせるのは、とてもとてもザンネンだ。おまえがニューヨークを出て行ってから、あれはずっと独り言ばかり言っている。

「おまえが出て行ってから」手紙はただどどしいつづりでこう続く。

1951年10月30日、あれはジョロウイツツ先生のところから来て、ばかなことをしゃべり始めた。だからベッカー先生に電話をして、ベッカー先生がジョロウイツツ先生に電話して、あれにとって一番いいのは入院だということになった。

ユージーンは自殺衝動があった。つながりという点でいえば、このベッカー博士はマックスがずっと以前に援助していた医学生であるというだけではなかった。医師たちがユージーンを入院させられる病院は、キングスカントリーだけだった—つまり母親のバーサが最初入院した病院である。

ユージーン自身は、その3日後の1951年11月8日付の手紙でこう書いている。「ママも死んだのだから、僕も多分死ななきゃならないんだと思う。どうしてもそうしなきゃいけないとは思わないけど」これがマックスが

「運の悪い話」(11月15日)と呼んだもので、ある種のブルックリン版ギリシャ悲劇のようにマックスは医者たちに語った。

若いころについての多くの情報源となっている回想録を、マラマッドが1951年11月か12月に書いたのはこういう理由なのである。実際には、マラマッドが、診断の助けになる家族の背景に関する情報を伝えるために、ユージーンを担当医たちにあてて書いた長い手紙だった。一人称ではなく三人称で書かれているために、客観的な調子になっている。描かれているのは、再び明らかにされる母親の統合失調症である。

ユージーンはほとんど最初から学校ではうまくいかなかった。頭もよく能力もあり、攻撃的で、おそらく両親から過剰にほめそやされたために、ときには権威的になることもあるバーナードのほうは、学校ですすでに名声を確立しており、教師たちはユージーンも兄のレベルまで到達させようとした。ユージーンへの苦情の聞き役はもっぱらバーナードであった。幼いころから、彼はユージーンの親代わりを務めていた。結果的に、ユージーンは学校嫌いになり、ときには学校へいくことを嫌がった。バーナードはユージーンに対して「支配力」を持っており、弟にしばしば使い走りさせた。ユージーンが文句を言うと、バーナードに殴られた。(HRC20・2)

後年、彼はこう書いている。「弟のことが頭にあるときには面倒を見ていたが、忍耐が足りず、私が望むようにしないときには背中を殴ったりしていた。彼は泣いた。誰も私にやめろとは言わなかった」(HRC33・8)。父親は病気の妻とうまくいっていない商売の心配で頭がいっぱいだった。1952年4月の手紙で、バーニーがユージーンに殴り返してくることを望んでいたという記憶を語っている。「あの夜、子どもだから僕を殴ったし、僕の起こした問題には自分に責任があると兄さんは言った。僕はそうは思わないけど、殴られてもいいと思うなんて、兄さんは勇気がある」一つの単純な行為だけでは何も解決しないとユ

ージーンは述べている。実際のところ、1973年に心臓発作で死ぬまで、弟は多くの精神的な問題を抱えつつ生きることになった。

ユージーンがいう「僕の問題」は幼いときから始まっていた。バーニーにとっては、高架鉄道に乗ってコニーアイランドまでいく遠出は「ものすごい冒険」だった。「<sup>オーシャンシエ</sup>大海原(海ではなく)は私の深く感動させた」(HRC29・6)。だが、ユージーンがコニーアイランドへ泳ぎに行くとき、彼はいつも「生きてうちに帰れるのか、溺れ死ぬのか」を心配していた(HRC12・7、1945年11月3日)。1942年の7月の時点でも、マラマッドは未来の妻に、長年にわたるユージーンの声には出さないたくさんの恐怖について書いている。

彼が12歳ごろ、教会の外の溝につばを吐いたことがある。一緒にいた少年が、罪を犯したんだと言った。彼は蒼白な顔をして帰ってきたが、何も言わなかった。夜になって寝るときになると、暗い中で彼がすすり泣いているのが聞こえた。僕は15歳くらいだった。僕はベッドから出て、彼の肩に腕を回した。しばらくして、彼は自分のしたことを話した。僕は別に悪いことをしたわけじゃないと言った。それで泣き止んだ。

回想録では次のようにその記憶が語られている。

バーニーが弟の異変に最初に気付いたのはユージーンの思春期前期のことだった。彼は外にあるものを怖がっているかのように、窓のほうに視線を向けないことがときどきあった。しばらくすると、その症状と恐怖は消えるようだった。(HRC20・2)

だが、本当には何も消えていなかった。マックスからバーニーにあてた手紙のうちの一通は、商売は壊滅的でユージーンは病気だと書いたあと、悲しく、事実を記したあとがきで終わっている。「47年前、1905年の今日1月9日に、わたしはアメリカに来た」と。ま

るで、こう言っているようだ。こういうことすべてが起こったとは、しかも二回も起こるとは、こうした恐ろしい終わりのない円環、ねじれ、アイロニーの中にこそ、実際に起きたことが物語へ、記憶へ、感情へと転換されるのである。

アン・マラマッドが保管していた父の手紙は、太く筆圧の高い鉛筆書きであることが多く、店で勘定書きを書いたり品物を包むのに使っていた茶色の紙に書かれていることが多かった。「彼に話しかけると、彼が病気だとわかる」、「彼に面会に行くたびに、絶望的な気持ちで家に帰る」、「彼がじきによくなるとはとても思えない」この男と彼の言葉は、どうすることもできないある意味の客観的な状況、病院の指示を繰り返す、それを伝えるという状況から抜け出せなくなっている。「カミソリの刃とかナイフをユージーンに送らないこと。そういうモノを持つことは許可されていない。そういう患者にはよく注意しないとイケない。信用しちゃだめだ」(1952年1月7日)。「バーニーもし私が書いていることがわかれば教えてくれ。もしわからなければ、私のかわりに手紙を書いてくれるひとを誰かさがすから」と1951年11月15日に書き送り、涙を誘うのでなければ笑いを引き起こすだろう言葉を付け加えている。「私はユージーンに精神科医のつづりを教えてもらった。それであの子が私のために書いてくれた」そしてこうも書いている。「私はあの子にいい父親が子どもに話しかけるように話し、キスしてやり、果物やらたばこやらをもっていく」「とうさんは自分が大物で意味が深くなる気がするから単語を大文字で書くのが好きなんだと言っていた」(1950年7月1日)とユージーンが病気になる前に書いていたとおりである。

1951年の後半のあるとき、マックスは金の問題、離れて行ってしまった息子、心配している継母などについて、言葉にならない痛みとアイロニーをこめて、つぎのように書いている。

バーニー、もしお前がユージーンに会いたいと思うなら、クリスマスのおかげなら来れるだろう。金のことは心配しなくていい。もう2、300ドルなら出せる。金のことはレザ(訳注 継母)には知られるな。そのことを書いちゃいかん。金の心配はするな。

しかし、マラマッドはクリスマスには戻ってこなかった。彼の新しい生活では、二週間しか休みがとれず、往復で一週間はかかってしまうだろうからと11月28日の手紙に書いている。そのうえ、アンは二人目の子どもを妊娠しており八ヶ月目に入っており、しかもまだ幼く、体調のすぐれないことも多い男の子の面倒を見なければならなかったのだ。「おまえの家族を優先しなさい」マックスは12月3日の返事で息子の意思を承認し、そのかわりにもっと役に立てるよう6月に来るようにと書いた。週三回、父親は何とかして病院まで息子の面会に行っていた。ユージーンは最初入院したときだけ兄を求めた。「もしユージーンがお前に会う意向があればお前に頼んできたらどうか」とマックスは飾り気なく書いている。

1952年1月7日の手紙は痛々しいものである。

親愛なるバーニー

ユージーンに日曜に会った。お前からものを書く紙とペンをもらったと言っていた。でもあいつは全部窓から外に投げ出した。家に帰るとき、外でタクシーを待っている私が見えたので、あいつは窓越しに、とうさん、ここをみれば、たぶんペンが見つかるよと言ったんだ。みつけようとしたが、それはみつからなかった。

作家がこれを、あたかも人生がそのシンボルを差し出しているかのように、読んでいるところは想像に難くないだろう。これは「ペン」でなければならなかったのだ。兄がユージーンに、自分がそこへ行く代わりに自分に手紙を書くようにと送ったペン、ブルックリンのことを書くことによって、マラマッドをブルックリンから遠ざけることになったペンなの

である。また、「窓」でなければならなかったのだ。というのは、店の窓のなかに、マラマッドはある意味で、初めて父の姿を本当に見たのだから。そして精神病院の窓からマラマッドは最後に母の姿を見たのだ。アン・マラマッドはつぎのように述べた。

あるとき、彼の父が彼を精神病院に連れて行きました。彼は彼女に会いに中に入りませんでした。今となってみればそれが許可されていなかったのか、どういうことなのか、わかりませんが、彼の母は窓までやってきて、お互いに手を振ったのが、彼が母親に会った最後でした。

## 第二章 長い思春期

### ブルックリンの教育

短編集『魔法の樽』中で、フィリップ・ロスのお気に入りのマラマッドの文章は、「ボールを真上に投げあげている子どもには青白い空が少しだけ見えた」というものであった。狭苦しい環境のただなかに突然ちらりと光と空間が見えたその子どもは、マラマッド自身でもあったと、1963年5月12日にシドニー・リッチマンへの手紙の中に書いている。

私の自然に対する反応はいつも強いものでした。ブルックリンのプロスペクトパーク(訳注 フラットブッシュのそばにある585 エーカーある公園。セントラルパークを設計したフレデリック・ロウ・オルムステッドとカルヴァート・ヴォーの設計による)へ行くと胸がわくわくしました。16歳のとき、学校の友人に招かれて、初めてニューヨークを出て(2歳か3歳のころポリオの流行から逃れて、ベアマウンテンへ行ったことを除いて)アディロンダックスへ行きました。(訳注 ベアマウンテンはハドソン川の西側にある宿泊施設もある保養地。アディロンダックスはニューヨーク州東北部に位置する山岳地帯で州立公園に指定されている。アパラチア山脈の近くにある。1849年にガイドブックが出版されてから、多くの観光客を集める人気の保養地となり、1875年には200を越えるホテルがあった)

自然が私に与えた影響は圧倒的なものでした。(大学ではワーズワースに熱烈に傾倒しました。シェリー、キーツもお気に入りでした) 私は、あきらかに自然の美に飢えていたので。

(HRC29・6)

このブルックリン版ワーズワースの子ども時代の思い出の一つが、死んだ馬である。通りに硬直するままに放置され、その後死体の膨張を防ぐために警官が腹部を切開すると、「川の水、血、オート麦が腹からあふれて溝に流れ込んだ」バーナデット・インケレスに語ったもう一つの思い出は、仕立て屋にスーツの寸法をとってもらったときのものである。「仕立て屋が床に膝をついて、私の踵から腰までの寸法をとっていたとき、私はこの男の人生がどういうものかを考えて心をすっきり奪われてしまい、私の<sup>ヴォイス</sup>声を見つけたと思いました」

しかし、作家バーナード・マラマッドを形成するのにもっとも力があつたものは、無料で受けられるニューヨークの公立学校教育システムであった。彼は近所では優秀な生徒で知られていたが、彼が嬉しく思ったのは学校が家の近くにあることではなく、近くではないことだったのだ。後年それはさらにはつきりするのだが、教育は彼をブルックリンの家から外へと連れ出してくれるものであり、また、作家として彼を連れ戻すものでもあった。「大学では、私はある友人にこういう手紙を書いた。『ブルックリンよ、あなたは宇宙のすべてだ』と」(HRC31・6)。

とはいえ、最初は、外の世界では生き残る闘いから始まった。1930年代に彼のガールフレンドだったミリアム・ミルマン(後にラング)の未発表の回想録、「若きマラマッド—無垢の時代」によれば、「イディッシュ語を話す家庭で育ったので、幼稚園に行くまでは英語を話さなかったと、私に話したことがあった」その幼稚園で「彼は生き残るために、他の子どもたちと同じように話すために、素早く英語を

覚えた」彼は母親がそう発音していたので、自分も「悪覚」と言うべきところを「あーくとう」と発音していたことに気づいて、恥ずかしい思いをした(HRC20・3)。マラマッドが記憶にあるたった一つのおもちゃは母に買ってもらったもので、伸ばした紐を登っていくサルのおもちゃだったが、母はその名前

を読み間違えて、「のっていく」サルと呼んでいた(HRC20・3)。また、レオン・スナイダーは、マラマッドが *erstwhile*(昔)を *erstwise* と間違えて発音したのを笑いものにした(HRC33・8)。マラマッドは防御のために、鋭い舌鋒を磨かねばならなかったのだ。

彼が行った小学校はブルックリン、コーテルー・ロードそばにあった。そこで彼は初めて家になかった本を読み始めた『ロビンソン・クルーソー』、『二都物語』、『宝島』。まだ田舎の風情をとどめている食料雑貨店のある地域から一ブロック離れたところに公立図書館があった。学校では、子ども向けのアルジャーの冒険もの(訳注 ホレイショ・アルジャー〈1832-99〉は、『ぼろ着のディック』を初めとする、貧しい少年が自身の努力・勇気によって富と成功を手にするいわゆるアメリカンドリーム)の物語を書いて、130以上の三文

小説を出版し、ベストセラー作家となった)

や、扇情的で現実逃避的な三文小説に夢中になった。その主人公の中には、バッファロー・ビル(訳注 アメリカ西部開拓時代のガンマン、興行主。金鉱開発、斥候、インディアン討伐等にかかわって、ネッド・バントラインの小説の主人公となった。西部の冒険の実演ショー『ワイルド・ワイルド・ウェスト』を立ち上げて、米国、ヨーロッパを巡演した)、名探偵ニック・カーター(訳注 アメリカの多くの作家に書き継がれてきた架空の探偵、ス

パイ。別名キルマスター。初出 1886 年、複数の作家が 1000 点を越えるニック・カーターものを書き、人気を博した。1915 年には「ニック・カーター・ウィークリー」誌が出版された)、アインシュタインの脳とターザンの肉体をもつフランク・メリウエル(訳注 ギルバート・パッテンがパート・L・スランディッシュ名で出版した小説・短編の作品中の主人公。後に多くのラジオシリーズやコミック本が作られた)がいた(LCII14・1)。可能な限り、マラマッド少年は学校の課題を物語にしていた。日常的に友達に物語を聞かせており、それは自分が見た映画の話であることも多かったが、「うんざりするほど長々しい物語」であった(LCII11・14)。「近所のジョージという名の少年が物語にすごく夢中になる子だったので、みんなは僕に幽霊話を夜にさせたものだ。彼が幽霊話を聞くと、驚愕と恐怖で口をあんぐりあけてしまい、みんなはそれをめがけて水鉄砲を放ったりしていた」(LCII14・1)。別の話では、彼の文学的能力が開けさせた口めがけて水鉄砲を放ったのはマラマッド自身だということになっている。

3年生になると、彼はアメリカの自由におけるヒーロー的人物、ロジャー・ウィリアムズについての話を創作した。(訳注 ロジャー・ウィリアムズ〈1603-83〉はアメリカ先住民の公正な扱いを主導し、植民地の創設、バプテスト教会の創立にかかわった)その話には、熊との出会いの場面も入っており、それに「女の子との出会い」、インディアンとの話も入っていた。「書いた物語をもってある朝早く学校に行ったら、先生がひとりでそこにいて、物語を窓際に持って行って読み、『すごくいいね』と言った」ことを彼は記憶している(LCI50・3)。愛情を強く求めていた彼は、個人的な接触が持てそうな機会はいつでもとらえていた。

10歳になって、マラマッドはサルガッソー海に消えた船の物語を書いた。それは彼が「老水夫行」を読む前のことだった。(訳注 「老水夫行」はイギリスロマン派の詩サミュエ

ル・テイラー・コールリッジが 1798 年に出版した『抒情詩集』所収の詩。)「私にわかっていたことは、物語では私に船が必要な時には魔法のようにそこに船があり、そして私はそれに乗ってよどんだ水域を越え、陸に囲まれ、波穏やかな、毒を含んだ海へと旅していた」それが、後に続くあの厳しい修行なしに、最初に彼にもたらされた「生まれつきの才能」だったとマラムッドは書いている。「私はこうした物語の数々を、その使用料を払わなくてはならなくなる前に自分のものとしていた」(LCII11・14)。1980 年に書かれた覚書のなかで彼はその代金のいらぬ贈り物のような才能について、次のように回想している。

子どものころ、それは存在し、そこにあった。私はそれを手にした。それは私のものとなった—自分の価値を宣言するような、神秘と言ってもいいような感情を抱いた。一人で体を洗っているときに感じることもあった。学校で感じることもあった。(HRC20・3)

ジョージ・マルコヴィッツの記憶によれば、マラムッドは 9 歳か 10 歳のころにはもう書いていた。「彼は書くことについてはとても真剣でした。彼はいつも書き続けていて、私たちは、それほどひどくはなかったが、よく彼を笑いものにしたり、あざけったりしたものでした」バーニーは家の話は決してせず、家に誰かを招くこともめったにないことは、子どもたちの中でなんとなく理解されていた。「私たちは、第二の家族、彼にとって兄弟がわりでした」1973 年に出版された短編集『レンブラントの帽子』が献辞を捧げているのは、子どもらしい懐疑的な見方にもかかわらず、この友人たち、「昔の遊び仲間」であった。ハーブ・ワイトキン、ジョージ・マルコヴィッツ、ドイツ出身の少年だったハンス・カーバ

一、夜学の校長の息子だったジーン・ルイス、最終的にはジーンと結婚したが、最初はバーニーに熱を上げていたデンマークからの移民だったエッパ・ジョーゲンセンたちである。しかし 1966 年にハーヴァードでマラムッドの学生であったリンダ・ローウェルは、クィーンズの医者家庭に育った彼のもっと豊かな同年代の人物を知っていた。ピア・クレスジは自分には才能があると信じている、小さな食料雑貨店の子どもについて「彼はもっと金持ちの子どもと一緒にいたものよ。彼はたいた存在じゃなかった」と言っていた。

1923 年ごろから、マラムッドは第 181 公立学校へ、より裕福な子どもたちと通うようになっていた。1980 年代に書かれた「学校生活」では、そうした変化について言及されている。「最初、私は学校を怖がっていた。それから学校が大好きになった」(HRC20・3)。ハーブ・ワイトキンは学校から 3 ブロック離れた、中流階級の、ユダヤ系が多い地域に住んでいる同級生だった。彼の記憶では、なぜバーニーが、その区では群を抜いている新しい学校である第 181 公立学校にどうやって入学してきたのかは謎だった。というのも、彼は学校から 5 マイルも離れたところから通学しており、正式な通学地域からは外れていたからである。単に、家族が一マイルしか離れていないアルバマール・ロード 2700 に住んでいたときにすでに登録手続きをしていたためかもしれない。だが、グレイブスエンド通りから毎日自力で 9 歳の子どもが通うには、どんなにがんばっても 2 回路面電車に乗って、45 分はかかる道のりだった。少年はこの時すでに野心家であった。第 181 公立学校は「進歩的」な学校として知られていた。その理由は、ひとつには優れた学生を飛び級させていたからであり、また才能とエネルギーのある若い校長が着手した実験的な教育を提供しているという理由もあった。ネイサン・ペイザー博士は自ら質の高いスタッフを揃え、その中には経済状況の悪化のためだけでなく、左翼思想のために、職探しに困っている弁護士

も含まれていた。シラバスはかなりきびしいものだった。たとえば、たいていは5年生までに生徒たちはフランス語の学習を始めていた。家族史のための覚書の中で、マラマッドはこの学校を「私の人生で最も大切な学校」とであると述べていた。

未発表の回想録「バーニー、若き日」で、ハーブ・ウィトキンが学校の教師と親しい関係を形成する若い日のマラマッドの能力についてコメントしている。「第181公立学校での最終の3年間のすべての先生—マクダーモット先生、スクワイア先生、アフナー先生は、みな彼の魅力のとりこになっていた」彼は率先して行動し、自作の単発新聞を作り、同級生から聞いた物語を掲載した。マクダーモット先生の家に行き、彼女の恋愛問題のすべてがわかったと主張して、それを他の子どもたちに話した。1930年代初期のノートには、今は娘の所有であるが、マラマッドは自分の人格の特性のリストを作成している—この場合は6歳以降に起きた、謎めいているが恥ずべき20の事件と—ってよさそうである。一つは14か15歳のとき、レオンの母、スナイダー夫人に嘘をついたことであり、別の事件は、同じ年頃であるが、「ママを結婚相手として見る？」という謎めいたものであった。10歳か11歳のころには、教師に対して「ヒルダ・マクダーモットに求婚」というのがある。

マラマッドは他人の関心を求めた。そして後で罪悪感や恥辱で縮み上がるリスクがどれほどあろうとも、自分から進み出ることを恐れることはなかった。先生からは特別扱いされ、彼自身も限られた友人たちを特別扱いした。スクワイア先生はマラマッドを、一階にある小部屋の謄写版印刷室の責任者に任命した。その部屋で印刷が終わってから、マラマッドはハーブ・ウィトキンと座り込んで女教師や女子生徒のことをおしゃべりし、お互いの勃起を物差しで測りあったりした。年若いマラマッドは他の点では身体面では不器用な方で、スポーツもへたくそだった。『ナチュラ

ル』の未来の作家は野球の球を投げれば女の子のようだったとウィトキンは述べている。彼は25フィート離れたガラス板を(ボールで)割ることができなかったが、ハービーに投球練習の相手をさせ、何時間も途方もない決意で努力したが、男らしさを示すことはできなかった。だが、スポーツができなくても、浅黒い馬面でも、背が低くとも、女の子を惹きつけるのは得意だった。「バーニーの流儀は直接的で、説得力があり、優しく、誘惑的だった。それに加えて、思春期前期の子どもにしては、他のみんなよりちょっとばかり自由気ままなところがあったし、自信に満ちていた。学校まで遠くからやってきて、もっと自由に見えたし、親の規制に対して僕たちほど心配していなかった」彼はハーブに女の子を紹介し、彼が「バーニーの安心毛布」であるかのようにどこへでも連れて行った。しかし、彼の魅力は、見た目の自立性の下から少年がにじませていた、傷つきやすさであった。ミリアム・ミルマンにとって、「バーニーは家族の親密さを欲している孤児のように見えた。彼はたまたまそばにいる誰でもいいから、午後私たちの家に立ち寄るのが好きだった」どの母親も、大人のように話す一方、母性に訴えかける彼を好きになった。「彼はいつもどこかに行くところがあるのよ、あの子はね」とハーブ・ウィトキンの母は言っていた。ハーブは、ずっと後になってから、ある土曜の夕方、めずらしく、少年たちがマックス・マラマッドの店の裏手でクラブスに興じたことがあった。バーニーのサイコロの持ち方は、いつも両手の間に挟んで胸の高さに捧げ持ち、手のひらを平らに合わせて「あたかも祈りで、彼が必要としている運を神々に念じているかのようにだった」

仲間はみな—1928年にエラスムス・ホール高校へ進学したが、マラマッドは、意味ありげにいくつかの覚書で、それを一年後としている。「1929年私はエラスムス・ホール高校へ入ったが、そこで私は文学全般と、音楽、創作に目覚めた。母が同年死んだ」(HRC29・

6)。マラマッド関連の書類の中に、同級生ハーブ・ヤコブソンの1976年9月1日の日付のある短い個人的な回想もある(HRC11・7)。

1928年から1932年まで、私が在籍した間、そしてそれ以前の300年間、エラスムスホールは、市の教育システムではユニークな施設だった。それはフラットブッシュ街に面しており、道の向かいには、古いながらも使われているオランダプロテスタント教会があり、その教会の不屈の教区民たちがこの学校を創立したのは、イギリスが1660年にオランダ人からニュー・アムステルダムを盗んで、その名前をニューヨークに変えるよりも前のことだった。

エラスムス・ホールは19世紀後半にブルックリン市に譲渡され、そのオランダ、アングロ・サクソンの教育伝統に忠実に、同化の助けとなるように、東欧から流入してくる移民の子どもたちに応えるよう、20世紀初期に改築された。だだっ広い木造の建造物がブロック全体を占める建物に四方を囲まれる形で建っていたが、この中心的な建物の周りに建築家が新しく建築したのは、

その大きさや仰々しきでイェール大学の建物と競い合う、巨大な「アメリカの大学特有のゴシック風」骨組みであった。実際、この時代にフラットブッシュで起きた爆発的な住宅建設の産物たる子どもたちを収容するには決して大きすぎるというわけではなかった。8000人を越える生徒を擁して、一部の生徒は昔オランダのチューリップ畑であった場所に新たに建造された別館へ収容された。本当に、世界最大の高校の一つだった。

古典の伝統に忠実であったエラスムス高校はラテン語とギリシャ語の授業を提供していたが、ニューヨークでまだギリシャ語を教えている唯一の高校となっていた。男子生徒は伝統的なスーツに赤いネクタイを締め、女子生徒は髪に赤いリボンをつけて、みな行儀よく、秩序正しく、廊下でも静かだった。ニューヨーク市の5つの区の中では最高の高校だった。

迫りつつある大恐慌のおかげで、高校教師の給料は多くの他の職業よりは高額だったため、教師たちの質は高かった。マラマッドの友人の父親、バート・ラッシュは弁護士としての教育を受けていたが、化学の教師になった。秘書が週12ドルから15ドル稼ぐ時代に、研修中の教師は週給22・5ドルを稼ぎ、代用教員は42・5ドル、資格試験に合格した正規の教員は年収2500ドルが保証されていた(HRC15・7)。

フロレンス・リプリー・マスティンは、当時30代半ばであったが、国語を教える、レズビアンで詩人であった。(訳注 フロレンス・リプリー・マスティン (1886—1966) ペンシルバニア生まれの詩人、代表作『Green Leaves』(1918) エラスムス高校で詩を教えた)彼女は日本と戦争中であるにも関わらず生徒に俳句を書くよう指導した。1950年にマラマッドは文学賞受賞作である短編集『魔法の樽』(訳注 全米図書賞受賞)を、献呈の言葉を添えて彼女に送った。そのことを、彼女の年若い生徒の顔とともに回想し、(『ハムレット』におけるように、思い出のしるしとして)「ローズマリー」と題した詩を1966年9月16日に書いている。

少年は、暗い目と何かを聞こうとする表情をして

私のクラスでもっとも光り輝き、もっともよそよそしかった。

世界の長い不正があなたの心を幼くして傷つけたのか？

あなたは人生の苦い味を知っていた。

私は何をあなたに上げることができただろう？

あなたが榮譽に浴したとき、あなたは私にこう言った。

「あなたの手は花に手を伸ばす手なので、

もし花がないのなら、花はあなたの手に届くために育つでしょう」

今私の隠遁の部屋から、私はあなたにローズマリーをおくろう。(HRC18・7)

(訳注 There's rosemary, that's for remembrance · Pray love, remember · Hamlet Act IV Scene V,



175-176・訳文「はい、マンネンロウよ、思い出のしるし——ねえ、お願い、忘れないで『ハムレット』第四幕第五場 松岡和子訳 ちくま文庫 シェイクスピア全集一)

彼を気にかける人ならだれでも彼の目の物悲しいマホガニー色に気づいたが、その目の「輝き」と「よそよそしさ」はより深い気づきである。大人になってから、彼が『白痴を先に』(Idiots First)と『新しい生活』(A New Life)を彼女に送ると、その返事に彼女は彼のなしとげたことに「誇りを感じている」と書き、彼女の気に入った箇所を引用した。一つは「結婚するなら」において、フォイヤーが苦悶する作家ベン・グリックマンについて述べた言葉である。「彼は自分が何に苦悩したかは私には言わなかったが、それは彼の目の中に見えた。かれは人生とは何かを知っていたのだ」これこそマラマッドなのだと言った。彼女にD・H・ロレンスの『息子と恋人』を思い出させるマラマッドなのだ。もう一か所は『もうひとつの生活』からである。「彼は、教師として、彼らの教師がこれまでに教えたことより多くのことを成し遂げられる、才能ある数少ないものたちの成長を手助けするためならできるだけのことをしようと思った」

「あなたに何をあげられるだろう？」私は先生たちに巡り合えて大変幸運だった。彼らのために私は本を読み、書き、自分を育てていったのだ」とマラマッドは言っている(1963年5月12日、HRC29・6)。ペンントン大学でマラマッドの教え子であったニナ・ペリカン・ストラウスは1975年に彼と交わした会話を記録していて、そのときマラマッドは読書によって公立学校教育が彼に与えてくれたものには感謝していると話した。「私はなんのつてもない貧しい少年だった。金は持っていなかった。友達もいなかった。他人を支配する力もなかった。読書こそ私をうぬぼれた気分させてくれる方法だった。文学を理解することで私は自分の価値を感じられたし、人生の価値も感じられた。凝縮されて生きられた本の中の人生なんだよ。本は心を揺

り動かす物なんだね。若いときには批評的知性の感覚なんかはないものだ。しかし、作家が私に与えなければならぬものはよく感じていたんだ」

このようにして、たとえば、彼はヘミングウェイに出会った。『武器よさらば』や『日はまた昇る』の彼の若いときの読みを振り返って、彼はニナ・ペリカン・ストラウスに次のように語った。「主題よりは技法や雰囲気だった。<sup>シンプルディ</sup>単純さという仕掛けがこれほど力強いものだとは知らなかった」単純さの中にあっても、彼はそこに隠されているものを感じた——ヘミングウェイの場合は、たとえば、死の恐怖だった。「間接的なものの有効性、これが人の心を動かす」彼は自分の心にあることを言わないことに込められる力を好んだ。そこで文体は「抑制的な重々しさ」を醸し出す。というのも、若いマラマッドには彼自身が恥じている母の死に関する秘密があったからである。「それを口にはできない」と彼はニナに言った。「そのことで犠牲者の立場から逃れるために、それを儀式化するわけだ。それで抑圧のもとでやっと一時的猶予が？恩寵が得られるんだ」

しかし、最初、彼は作家としてではなくエラスムス演劇グループの俳優として知られていた。この演劇グループには卒業後も学外で通い続けた。第181公立学校の遊び仲間以外には、このグループがマラマッドの小規模な仲間となった。声域が広く、気分をがらっと変えることができるので、マラマッドは声帯模写をし、いくつもの人格をつぎつぎに演じ、美しい赤毛の女優、レナ・フラドキンの関心を享受し、俳優として、監督として彼が皆から注目されたことを明らかに楽しんでいった。ただ照明の手伝いをしているときでさえ、演劇の教師、マット・スラールは、彼のことを喜劇めかして、彼女の人生の光と呼んだ。彼はマットや、別の教師クララ・モレンディックとデートしていた。

作家としては、最初彼は学校の雑誌『エラ

スマアン』に寄稿しようという野心を持ち、最後には短期間であるが編集にも携わった。だが、当初は「作家で、ジャーナリストでテレビスターでもあるドロシー・キルガレンが編集をしていて、私の最初の短編を不採用にした。彼女は『これはエラスムスには陰鬱すぎる』と言ってね。だから喜劇的な面のあるものを書こうとしたんだ。特に都会を訪ねる田舎者の方言ものをね」(LC I 50・3)。彼はいつも耳が良かった。エラスムスの同級生ベン・ローブはポール・マラマッドに、ポールの父(訳注 マラマッド)とエベット・フィールド(訳注 ブルックリン、フラットブッシュ地区にある野球場。1957年までブルックリン・ドジャーズのホームグラウンドであった)で野球の試合を見たときのことを話した。このとき、バーニーは前に座っている男に、彼がピッツバーグ出身だとわかると言ったのだった。それから、どちらかといえば「軽い」「ハイラムのやることなすこと」の物語が1931年4月5月6月の『エラスミアン』にシリーズで掲載された。南部の田舎百姓ハイラムは、故郷の友人ジョシュに手紙を書く。「それで、おれは今フラットブッシュにいる(地面はフラットじゃないし、ブッシュもないけど)ここの学校の状況をちょっと調べてるってわけだ」彼は「ラスパーズ・ホール」と聞き間違えた学校に注目し、偉大なオランダの学者、デシデリウス・エラスムス(1466—1536)に敬意を表して最近建立された彫像に出くわす。「本を読んだる男の新しい銅像だ。苗字はこいつもラスパースだ。名前のほうはデシデオスだって誰かが言った」何の本を読んでいるのか知りたくなくて、ハイラムは学校が終わってから彫像に梯子をかけて登っていき、結局梯子が外れて上に取り残されてしまう。ついに名前をちゃんと読めるようになると、アルマ・マター(訳注アルマ・マターには母校という意味と、恵みの母という意味がある)を前にした善良にして感謝に満ちた卒業生のように、「おれはエラスムスの腕の中で二、三んち寝てた」と結んでいる。

しかし、マラマッドのエラスムスにおける救い主は、別の国語教師、若きクララ・モレンディクであった。ある日彼女は、若きマラマッドに、彼がいつか何かを成し遂げるだろうから、自分のことは覚えておいて欲しいと言った。ミリアム・ラングはポール・マラマッドに未発表のインタビューで次のように語っている。

あなたのお父さんが高校にいたとき、彼女は彼に誰にも見えないものを見たんです。そして彼女は、誰もお父さんの能力を信じていなかったときに、お父さんに是非書くようにと励ましたんです。その当時、お父さんを知る人はみんな、お父さんがいつか作家になるつもりだとじかに聞いていました。私たちは笑いました一面と向かってじゃなくて—私たちの間でね。私たちはこう言っていました。「ねえ、なんで彼は自分が有名作家になると思うんだろうね」

かれは別の教師、エレン・パチュラーに国語の研究室で自慢したことがあった。「僕は偉大なアメリカ小説を書きますよ」(HRC18・7)と。しかし、同時に、クララがそう言ったときには驚いたのであった。1983年に、マラマッドはミリアムに、自分が成し遂げたことで、彼はクララと自らの確信を欠いた自我の両方に対して、何かを証明したのだと言った。そして「もし今彼女を抱きしめることができるのなら、そうしたいものだ」とも。

クララは彼のほんの6歳か7歳年上にすぎなかった。彼女は小柄でほっそりしたきゃしゃな女性で、教えながら週のうち何日かは歴史の博士号をとるために夜は大学院に通い、ニューヨーク市長で後の首席判事となったチャールズ・エヴァンス・ヒューズについての論文を書いていた。しかし、彼女が教えていたのは国語であり、はっきりそれとわかる人柄やカリスマを見せることなく、変装でもしているか、抑圧しているかのようには、彼女は物静かに、勉強している本の中にずべてを正確に集中していた。ミリアムの妹ドリスが1984年にこう書いている。「彼女の特別な資

質はすぐに皆に深い印象を与えたわけではなかった。学期が進むにつれて、彼女の資質がゆっくりと表れ、開かれていった。でも、彼女の資質が表れていくにつれ、その影響力は、彼女の静かで、物柔らかな口調の、断言せず、説教がましくない、うわべの物腰とは正反対だった。私たちはまるで彼女が心の秘密の鍵の宝庫であるかのように、彼女に手を伸ばしていった」

彼女こそが、1932年2月の『エラスミアン』に発表されたエッセイ「生—カウンター—の後ろから」を書くよう励ました人物であった。このエッセイで、マラマッドは初めてブルックリンの宇宙で見られる、平凡だが依然として人を悩ませる事件に、真剣に取り組むべき主題を見出したのである。「トンプソン氏は失業した……彼の妻はまだ服にたっぷり金を使っている……マーフィ氏の長男は逮捕された……彼の末息子は警官だ」彼はそうした事柄を並べて描いていくことができた。彼はますます「移民の世界を私が代弁する」ように書けるようになった(HRC27・5)。このエッセイは学校のリチャード・ヤング賞を受賞し、さらによいことに、スコラスティック出版社が後援している全国規模のスコラスティック賞第二位(マラマッド自身は「何かの賞」としか言っていないが)を受賞した。

しかしマラマッドの昔のノートに記載されている恥ずべき行いにもう一つのヴェールのかかった記憶がある—「クララからードル借りる」—クララは裕福ではなかった。彼女は質素で厳格な家庭の出身でブルックリンでの人間関係も限られたものだった。彼女の父はバーテンダー、母はハウスキーパーだった。マラマッドは彼女の家を訪れ、後には友人の幾人かも連れて行った。その後、ミリアムは彼に1983年5月26日に手紙を書いている。「感情を表さず、抑制が効いていて、自分の感情を十分に表現できないのに、なぜ彼女は自分とは全く違った若者たちの人生にやすやすと溶け込んで、あれほどいい関係を持てたのだろうか？」ミリアムは、クララが「自分の

個人的な生活のむなしさゆえに」「私たちを通して生きる欲求を持っていた」のではないかと考えていた(HRC9・1)。

後に、クララは、やはり教師であるベン・エドワーズと結婚し、ラファイエット高校の校長になった。そこで、後になって、彼女はマラマッドを臨時教員として雇ったのだった。エラスムスグループのメンバーはエドワーズが好きではなかった。「彼女が彼と駆け落ちすると、誰もが傷つくか凶滅していた。バーニーはその最たるものだった。彼は、この結婚は失敗だと考えていた。彼は彼女にはもう少しましな人生を望んでいた」エドワーズは酒飲みで、ドリス・ミルマンは、クララもやはり酒飲みになっていった可能性があると考えていた。そして、かつての学生たちとの友情からしだいに退いて行ったのだった。この悲しい終わり方が、1984年にドリスとマラマッドがクララを全国国語教師協会の賞にノミネートした理由の一つであった。マラマッドは、詩と文学の喜びのめざめを彼にもたらしたことに對して彼女が賞をもらうことになったら、どれほどうれしかと書いた。彼女は

並外れた人だった。素晴らしい教育を受けており、教えることに関心を持ち、多くの知性と、要するに、教えることに関心と情熱を抱いていた。彼女は学生たちが好きで、自由に本を貸してくれた。彼女の家は私たちに開かれており、私たちはよく訪ねて行った。今日に至るまで(私は70歳で彼女は76か77歳である)私は彼女の父も母も、彼らが私たちに示してくれた関心も、彼らと一緒にいる喜びも、忘れてはいない。(HRC18・7)

これはマラマッドが1980年代に書いていたものの最後の落ち着きどころであった。1959年にシカゴの朗読会に行ったときに、若い教員だったテッド・ソロタロフがヘレン・ポバー—『アシスタント』の食料雑貨店主モリスの娘—の描き方、あと6単位が新しい人生を意味する、という考え方は、ユダヤ人の教育崇拜のステレオタイプに対する諷刺では

ないかと言ったときに、マラマッドは突然怒り出した。「断じてそんなことはない！」マラマッドは怒鳴った。「私は誰かの教育への探求を諷刺したりなど決してしない。教育がなければ、私は決して作家になれてはいないだろう」

ヘレンは若い日のマラマッドにおける何かを表している。この小説に関するノートの記載事項は、父と関連した、彼女の欲求を記している。「彼女は彼があきらめてしまったこと、どんなものであれ自由な意志を失ってしまったことを感じている。彼女は自分の自由意志を失いたくないと考えている。最後に、彼女は父親のような運命の消極的な受容から逃れて教育によってよりよい人間にならなければと感じる」(HRC19・1、153頁)。しかし、ソロタロフはマラマッドの怒りについて、次のように結論づけている。

彼のきまじめさは感動的でもあるが、当惑させるものでもある。それは、モリス・ポーバーを造形した浮世離れした意志と誠実さと、大学教授クラブでは受けそうにない、ほとんど幼稚なお説教臭さともいえる感覚を伝えるものである。(ソロタロフ、236-7)

彼はしばしば知的に懐疑的な辛辣な批判にさらされなければならなかった。そうしたことは、文学的に独立独行の人間となるためのマラマッドの闘いの中心となるものであり、たやすくそれを手に入れた人間にとっては、まだ幼稚すぎるかきまじめすぎるかセンチメンタルすぎるのだった。マラマッドは、独力で生きようとする登場人物の信念を発展させ、表現し、保護するために、強力な言葉を必要とするようになるのだった。

#### 略語および出典

CBM: *Conversation with Bernard Malamud*, ed. Lawrence Lasher . Jackson: University Press of Mississippi, 1991.

HRC: Malamud Papers, Harry Ransom Humanities Research Center, University of Texas at Austin followed by box and folder numbers

LC : Malamud Holding, Library of Congress

MFB: Smith, Janna Malamud. *My Father Is a Book*. Boston: Houghton Mifflin, 2006.

TH: *Talking Horse: Bernard Malamud on Life and Work*, ed. Alan Cheuse and Nicholas Delbanco. New York: Columbia University Press, 1996.

Davis, Philip. *Bernard Malamud: A Writer's Life*. Oxford: Oxford University Press, 2007.